琉球大学学術リポジトリ

市場流通からみた沖縄産キクの現状と課題

メタデータ	言語: 出版者: 沖縄農業研究会 公開日: 2009-01-29 キーワード (Ja): 沖縄産キク, 花き, 市場占有率, 出荷状況, 周年出荷, 品種開発, 輪ギク キーワード (En): 作成者: 名嘉, 重則, Naka, Shigenori メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/0002015444

市場流通からみた沖縄産キクの現状と課題

名　嘉　重　則
（沖縄県経済農業協同組合連合会園芸部）
Shigenori NAKA : Present situation and problems in crysanthemum cut flowers in the circulation market

はじめに

本県における花きの営利栽培の起源は、戦前のテッポウユリの球根生産にさかのぼると言われている。しかし、花き類の生産が飛躍的に伸びたのは、昭和47年の本土復帰後である。復帰後、植物防疫法の規制緩和により花き類の県外出荷が容易となり、関係機関等による生産奨励により、県内各地で花き生産の意欲が高まってきた。その後年々生産が拡大され、現在は国内有数の、花きの周年供給産地に成長している。

県農林水産部の平成５年産の生産実績によると、沖縄県は花き類合計で全国第８位、切花類第３位で、生産総額は190億円となっている。単純に計算すると県外出荷開始後、毎年10億円の生産額が伸びてきたことになり、県内産業の中では驚異的な数字であると思われる。その核をなしてきた品目はキクであり、キクの生産額は愛知県に次いで第２位、その中でも小ギクは全国一の生産県となっている。本県花き総生産額に占めるキクの割合は64%で、非常に高い占有率であり、これまでの花き産業の順調な発展は、まさにキクに支えられたものであると言えるであろう。しかしキクの生産出荷開始以来、20年を経過した現在、検討すべき課題も多く発生している。

以上の点を踏まえ、市場流通における本県産キクの現状を分析し、今後の発展に向けた問題提起としたい。なお今回の分析数値は出荷量をベースにしたので、生産額と若干異なることを記しておく。更に県全体の資料が入手できず、沖縄県経済連の出荷実績に基づいていることも、予めことわっておきたい。

国内におけるキクの生産と消費

農水省が発表した平成４年産花きの生産状況調査より（表１）、切花類の品目別生産状況を調べると、キ

表１　切花類の生産状況（平成４年）

単位：百万本，%，百万円

区分 / 品目	全国			沖縄県		
	出荷数量	比率	生産額	出荷数量	比率	生産額
キク	1,963	34.9	95,441	217	74.1	11,649
（輪ギク）	(1,258)	(22.4)	(70,567)	(59)	(20.2)	(4,561)
（スプレイギク）	(157)	(2.8)	(7,663)	(12)	(4.1)	(603)
（小ギク）	(548)	(9.7)	(17,211)	(146)	(49.8)	(6,485)
カーネーション	691	12.3	28,689	0		0
バラ	475	8.4	30,865	5	1.7	203
洋ラン	34	0.6	10,659	10	3.4	1,819
球根切花	527	9.4	34,840	11	3.7	476
その他切花	1,383	24.6	63,051	15	5.1	1,078
枝物	350	6.2	11,089	0		0
葉物	201	3.6	4,648	35	12.0	917
計	5,624	100	279,282	293	100	16,142

資料：農林水産省農蚕園芸局「花きの生産状況調査」

ク34.9%、カーネーション12.3%、バラ8.4%となって3品目で55.6%のシェアを占めており、その中でキクは 1／3 強の高い生産比率である。更にキクの生産内訳をみると、輪ギク22.4%、スプレイギク2.8%、小ギク9.7%となっおり、輪ギクの生産比率が非常に高いことがわかる。

表2　切花類に占めるキクの出荷占有率の推移

単位：百万本，%

品目＼項目＼年		昭和61	昭和62	昭和63	平成元	平成2	平成3	平成4	伸長率 H.4／S.61
輪ギク	出荷量	1,384	1,394	1,361	1,244	1,242	1,229	1,257	91
	比率	30.8	30.2	28.4	24.3	23.3	22.7	22.4	
スプレーギク	出荷量	41	46	74	100	117	131	157	383
	比率	0.9	1.0	1.5	1.9	2.2	2.4	2.8	
小ギク	出荷量	308	306	329	490	509	528	548	178
	比率	6.8	6.6	6.9	9.6	9.6	9.7	9.7	
キク計	出荷量	1,733	1,746	1,764	1,834	1,868	1,888	1,962	113
	比率	38.5	37.8	36.8	35.8	35.1	34.8	34,9	

資料：農林水産省農蚕園芸局「花きの生産状況調査」

本県の生産比率を全国と比較すると、キクの生産が多いことは同傾向であるが、比率は圧倒的に高く74.1%を占めている。次いで、洋ランの3.4%、リアトリス3.2%、アレカヤシ2.8%となり、全国とは異なる品目構成である。ちなみにバラは1.7%、カーネーションはほとんど生産がない。

近年洋花類の生産が伸び、キクの生産及び消費は横ばいから減少傾向にあると言われている。そこで、昭和61年から平成4年までのキクの出荷量を調べ、表2に示した。それによると、昭和61年を100とした場合、平成4年の伸び率は輪ギク91%、スプレイギク383%、小ギク178%、キク計で113%となっている。確かに輪ギクの生産は落ち込んでいるが、スプレイギクと小ギクは大幅に伸びている。キクの総出荷量は、切花類全体の125%に比較すると伸び率は小さいが、決して減少はしてない。切花類に占める比率も、平成元年以降は約35%前後で推移し、出荷量は微増傾向にある。

更に細かく調べると、輪ギクの生産では露地物の生産が66%と大幅に減少しているが、逆に施設物は121%と増加している。このことは露地産地の生産者の高齢化、後継者不足、および施設産地における年2～3作型の周年栽培への移行があると考えられる。輪ギクも平成元年以降は減少傾向に歯止めがかかり、出荷量は横ばいで推移している。

スプレイギクはトルコキキョウ、チューリップ、スターチス等の洋花類と、同様な伸びを示している。輪ギク、小ギクの仏花需要と異なり一般消費、贈答、催事、営業用として用途が幅広く、消費形態が洋花に類似していることによるものと思われる。近年、育種も盛んで消費者のニーズに合わせ花色、花形等、多品種化していることも伸びてきた要因の一つであり、今後も伸びていくと予想される。

小ギクは切花類の平均伸び率と比較すると、61年対比で大きく伸びているが、平成元年以降は年2～3%台に鈍化している。仏花需要を主体に切花類の約10%のシェアをもち、その約30%は沖縄産が占めている。本県の生産の増減が、伸び率や市場価格に大きく影響する品目であり、本県の伸びと同様に推移している。

以上のことから、キク全体の生産は昭和63年までは減少傾向にあったが、平成元年以降は横ばいから微増に転じていると判断される。キクの月別消費割合と卸売単価を表3に示した。年により出荷量と市場単価は変動があるので、数値は平成3年～5年の市場流通の平均値で示してある。

これによると、キクは12月、8月、3月、9月の順に流通量が多い。12月は一般家庭の正月用の需要によるものだが、それ以外の月は彼岸、盆等の墓参りに使う仏花需要が大きなウェイトを占めている。特に小ギク、輪ギクはその傾向が著しいが、輪ギクは葬儀用としても安定して需要がある。スプレイギクは前述したように用途が異なり、需要は平準化の方向にある。スプレイギクが10〜11月に流通量が多いのは、季咲きの花が出荷最盛期となる為である。本県のキクの出荷期間内に、12月と3月の最需要期があることは、産地として大変有利なことであり、それをいかに活かすかが今後の生産振興の課題であろう。

表3　キクの月別消費割合と卸売単価（平成3年〜5年平均）

単位：%，円

品目	月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	年間
輪ギク	比率	6.0	6.0	9.7	6.9	6.9	7.2	9.1	11.3	10.5	7.9	6.5	12.0	100
	単価	88	87	85	71	72	55	53	59	64	46	71	80	70
		(72)	(73)	(80)	(62)	(53)	(59)					(75)	(65)	(73)
小ギク	比率	6.2	6.6	14.3	5.4	6.1	6.3	8.2	11.6	10.4	6.3	5.9	12.7	100
	単価	35	41	47	49	33	24	28	38	39	33	31	34	37
		(42)	(43)	(47)	(51)	(39)	(37)	(38)				(43)	(42)	(45)
スプレイギク	比率	5.0	5.3	7.8	7.9	7.1	6.4	7.2	7.9	9.3	12.3	12.3	11.5	100
	単価	60	62	66	64	58	55	53	55	57	47	47	54	55
		(53)	(50)	(53)	(49)	(39)	(32)					(42)	(45)	(49)
計	比率	6.0	6.1	10.9	6.5	6.7	6.9	8.6	11.0	10.3	7.9	6.9	12.2	100

資料：日本花き卸売市場協会「花き市場流通調査概要」、（　）内は沖縄県経済連扱いの平均単価（平成3年〜5年）

次に花き卸売市場における卸売単価をみると、年間平均では輪ギク70円、スプレイギク54円、小ギク37円／本となっている。月別の単価は、冬春季は高値で推移し、夏秋季は平均値を下回る傾向にある。本県の出荷期間は、市場単価も高値で推移し条件的には有利であると言える。本県産価格（経済連扱い）と市場平均単価を比較してみると、小ギクは各月、年間とも市場平均を上回り市場評価が高いことがわかる。しかし輪ギクは年間平均では高いが、月別には市場平均を下回る。スプレイギクは年間、各月とも下回る単価となっている。この原因は品種と品質較差によるものであり、新品種の導入と品質向上が大きな課題であると言える。

次に色別の消費割合について少しふれておきたい。キクの生産比率のうち、輪ギクは64.1%の比率を占めているが、色別の消費割合は白系が60%、黄系30%、赤系10%である。この比率は輪ギクの消費形態と大きな関係がある。輪ギクは一般的には葬儀需要が主体である為、白系の需要が多く、品種も極力しぼりこんだ方が良い。市場での主力品種は、「秀芳の力」と夏秋ギクの「精雲」である。黄、赤の色物は彼岸、盆、正月の

表4　小ギクの色別販売単価

単位：千本，円，%

	配色理想比	平成2年度			平成3年度			平成4年度		
		数量	単価	構成比	数量	単価	構成比	数量	単価	構成比
黄系	40	24,125	46	39	24,300	47	35	32,432	40	44
白系	32	23,531	44	38	25,375	42	37	24,147	44	32
赤系	28	14,098	48	23	19,359	44	28	17,939	46	24
合計	100	61,754	46	100	69,034	44	100	74,520	43	100

資料：沖縄県経済連「花き会議資料」、年度ごとの数字はシーズン（11〜5月）の計である。

物日に需要が多く、平月は比率をおとした方が得策である。経済連扱いの出荷実績をみると、黄系80%、白系10%、赤系10%の割合となっており、今後は他県との競合はあるものの消費実態に合わせて、白系品種の出荷比率を高めることが課題であろう。

小ギクの色別割合は、黄系、白系、赤系のほぼ同比率が良いと言われている。小ギクは仏花需要が主流で、3色を組み合わせ束売りするのが通常である。配色バランスのくずれは、市場販売単価にも影響し有利な販売ができない場合が多い。これまでの販売におけるデータに基づき、配色の理想比を黄40：白32：赤28で設定して生産農家へはさらに細かく、月別の配色比を設定して作付け指導を行っている。表3の色別販売単価をみると、基準比を越えた場合平均単価を下回る結果がでており、有利に販売するには配色バランスをとり、計画的に生産することが大切である。

沖縄産キクの出荷状況と問題点

1．品目別生産内訳

これまで全国のキクの生産状況と消費動向について、おおまかに述べてきたが、これから県産ギクの出荷状況と問題点を整理してみたい。本県のキクの出荷数量は、表1に示した通り約2億2千万本で、全国シェアの11%を占め、県内切花シェアにおいては74.1%を占め、全国第2位のキクの生産県である。その内訳は小ギク49.8%、輪ギク20.2%、スプレイギク4.1%となっており、切花生産の半分が小ギクである。小ギクは全国シェアにおいても27%を占め、約1億5千万本の出荷量を誇り、名実ともに全国一の産地である。輪ギクは約6千万本で 4.7%のシェアを占め、愛知県（約30%）、福岡県（約10%）に次いで第3位である。スプレイギクはここ数年、生産意欲が高まりシェアも 7.6%まで伸び、第5位の位置にある。

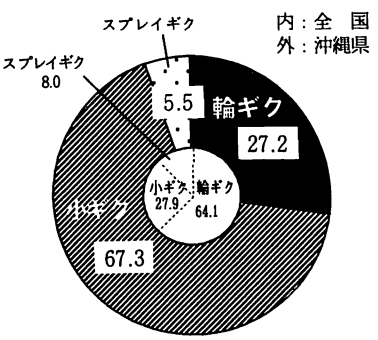

図1　キクの生産内訳

資料：県農林水産部「花き生産の概況」

図1にキクの生産内訳を示してみると、輪ギク出荷比率は全国64.1%に対し、沖縄27.2%、同様に小ギクは27.9%に対し67.3%、スプレイギクは8%に対し 5.5%となり、輪ギクと小ギクの出荷比率が逆転している。このことは、今後の生産拡大を図る上で是非留意しておきたい点である。輪ギクは市場流通量の20%強を占める品目であり、花き生産を安定的に拡大する為には、輪ギクの生産比率を高めることが大きな課題である。経済連としても、これまで諸対策を講じてきたが、実態としては伸び悩みの状況にある。その原因としては、①高度な栽培技術が求められる、②摘蕾、収穫作業に手間がかかり規模拡大が難しい、③小ギクに比べ収益性が低い、④単収が低く在圃期間が長い、⑤施設化の遅れ、等が考えられる。以上の理由で、生産農家が輪ギク生産を避け、小ギクへ品目転換する傾向が強い。

図2に示すように、輪ギク出荷が横ばいに推移する中で、小ギクは年々順調に出荷量が伸びている。その要因には、①3月彼岸の最需要期がある、②露地栽培で生産コストが安い、③栽培技術の統一化が図れる、④大規模経営が可能である、⑤年2作栽培による土地の高度利用ができる、等が考えられる。更に特筆すべきことは、独自品種の育成をしてきたことである。昭和60年に、県農試園芸支場と共同開発したイソ系スプレイ小ギク品種の普及により、現在の小ギク産地が形成されたと言っても過言ではない。

2．市場占有率と月別出荷の状況

前述したように、小ギクの生産拡大が本県花き産業を発展させてきたことは周知のとおりであるが、今後

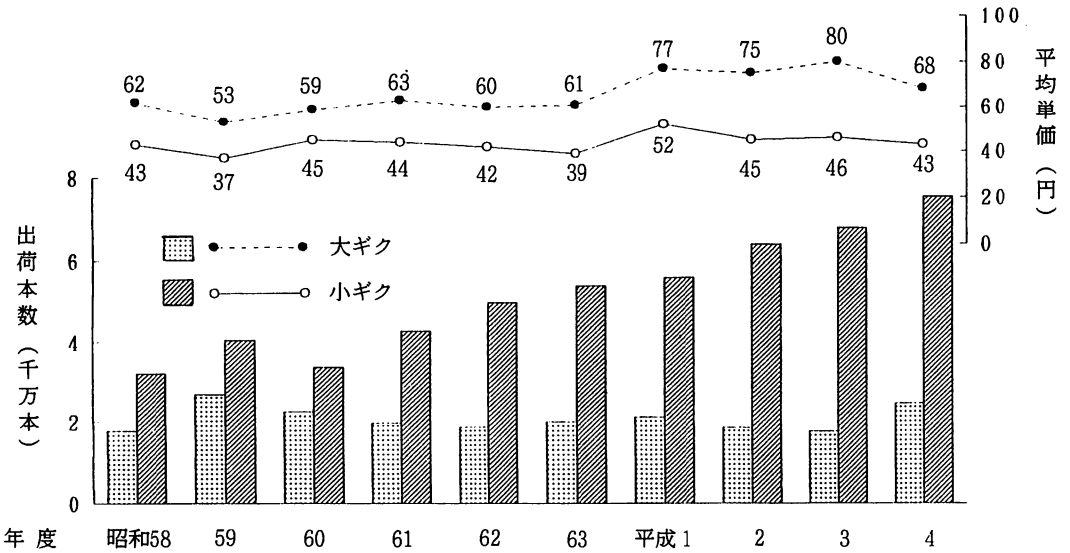

図2　キクの出荷数量と平均単価の推移（昭和58～平成4）

資料：沖縄県経済連「花き会議資料」

も同様に拡大できるかという点では課題が多い。

表5に示すように、東京都市場における沖縄産小ギクの占有率は、1～5月までの5ケ月間は50%以上を占めている。単月でみると2月は78%、4月は75%と高く、3月の彼岸需要期は91%の占有率である。輸送の関係上、東京都への出荷比率は他地域に比べると若干高いものの、本県は全国への産地直送を実施しており、全国市場同様の傾向とみてよい。これらの数値から予想されることは、2～4月の最盛期は、県全体で計画的な生産をしていかないと、価格暴落につながる可能性が高いと言うことである。3月については、末端消費の伸びが期待できない限り増産は危険であり、又避けるべきであろう。基幹品目の価格低迷は、農家経営を圧迫するとともに、花きの生産振興に大きなダメージを与えかねないからである。しかし逆に考えると、市場占有率が高いということは、全県的な生産、出荷の調整機能が強化されれば、価格の安定化を図れることにもなる。

表5　東京都中央卸売市場における沖縄産キクの占有率（平成5年）

単位：%

品目＼月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	年間
輪ギク	10	18	29	6	2							12	7
小ギク	59	78	91	75	53	10					2	39	34
スプレイギク	9	11	15	6	4	1						5	3

資料：沖縄県経済連「花き会議資料」

表6　沖縄産キクの月別出荷比率（平成5年）

単位：%

品目＼月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	年間
輪ギク	13	18	39	9	3							18	100
小ギク	10	17	37	14	9	2						11	100
スプレイギク	15	19	25	16	10	2					1	12	100

資料：沖縄県経済連「花き会議資料」

次に表6で月別出荷の状況をみると、いずれのキクも2～4月に集中出荷され、この間の出荷比率は輪ギク66%、小ギク68%、スプレイギク60%となっており、特に輪ギク、小ギクは約40%が3月の出荷である。キク生産第1位の愛知県の場合は、年末出荷が比較的多いものの、周年を通して出荷されている。また第3位の福岡県も周年出荷体制への取組みが強化されてきている。本県もキクの主産地をめざして出荷期の拡大を図ることが望ましく、生産農家の労力配分、効率的経営の面からも集中出荷は避けるべきであろう。しかし、出荷期を拡大していくと、他産地との競合は避けられず、それに対抗するには適正品種の開発、生産技術の向上を早急に図る必要があると思われる。

3月の小ギクの販売面における問題点は前に指摘したとおりであるが、輸送上における問題点を指摘をしておきたい。現在キクの輸送は航空輸送を主体にし、船舶輸送も有効的に活用しているが、3月の最盛期は両手段をフル活用しても積載能力を越える出荷量がある。これにはチャーター機輸送により対応しているが、これ以上の集中出荷はチャーターの比重を高めることになる。チャーター機輸送は輸送運賃が高いことが大きなネックであり、単純に比較すると、航空を100とした場合、船舶60%、チャーター180%の割合となり、チャーター輸送の比重が高まることは、生産農家の輸送コストの負担増につながる。

離島県である沖縄県は、輸送コストの低減化を図ることが重要な課題であり、市場需要量に合わせて計画的に出荷期を拡大し、船舶輸送のウェイトを高めていく必要がある。

3．小ギクの配色バランス

キクの作付品種の割合が、市場単価と密接な関係にあることは、消費動向の中で述べたとおりである。本県の小ギクの出荷において、配色バランスのくずれを市場から指摘される場合が多い。これまでの作付けの推移をみても、前年の単価の高い色の作付けが増加し、その年の相場低迷の要因となっている。3月の彼岸出荷の価格形成において、配色バランスは最も大事なことであり、基準比率を厳守した作付け指導が必要となってくる。また比率通りに作付けしても、その年の気象条件により品種間の開花差が生じ、バランスがくずれる場合もあり、開花調節のより確実な品種の選定、技術の確立が重要である。

農家個々における比率通りの作付けは、栽培管理、作業性の面から難しい場合もあり、生産部会か地域単位での指導が必要であろう。

今後のキク生産の方向

これまで述べてきたことを踏まえ、今後の生産振興に向けていくつかの課題を提起したい。行政、試験研究機関、出荷団体、生産農家それぞれの立場における方策があると思われるが、市場流通の立場からの意見として理解して頂きたい。

まず1点目は輪ギク、その中でも特に白系輪ギクの

生産を拡大することが重要であろう。3次振計の大きな目標を達成するには、市場流通量の一番多い輪ギクの生産拡大なくしては不可能と思われる。バラ、カーネーションは気象条件、栽培技術、施設等の面で制約があり、現時点では他県に比べ不利な点が多い。しかし、輪ギクは十分に有利性を発揮できると考える。表1に示したように、輪ギクの全国生産額は705億円で、本県の占める割合は6.5%である。単純に言えば、占有率を20%まで高めることができれば、約100億円の生産額が伸びることになる。他の品目では不可能な数字であるが、輪ギクでは十分可能性がある。更に小ギクは172億円のうち、38%（冬春季65%）の高い占有率をもっており、基幹品目である小ギクの価格安定化のためにも、輪ギクへの生産誘導が必要であり、そのためには輪ギクの収益性を高めていくことが大事である。

次に周年出荷体制をめざし作期幅の拡大を図ることが課題であろう。周年出荷と一口に言っても厳しい条件が多く、当面は6～7月までの作期の拡大を図ることが先決である。そのためには、現在栽培している秋ギクでは5月以降の良品生産は困難であり、夏秋ギクの導入を図る必要がある。経済連では、県農試園芸支場の指導を受け、平成4年度より夏秋ギクの品種育成に取り組み、平成6年に小ギクの白系品種を育成し、「夏風」と命名し普及を図ってきた。今期より出荷を開始しているが、市場評価も高く今後の生産拡大に期待している。しかし6～7月の市場価格は安値傾向であり、需要に応じた計画的な生産拡大が求められる。また高温時のため、栽培管理、鮮度保持、輸送対応にも留意していく必要がある。

3点目は、新品種の育成、開発機能を整備強化することである。近年消費者のニーズは多様化の方向にあり、それに応え安定した需要の確保と潜在消費の掘り越しを図るには、新品種の導入、育成は重要なことである。これから予想される産地間競争に対応していくためにも、本県に適したオリジナル品種の開発に積極的に取組む必要がある。更に優良品種の形質維持のための系統選抜を実施していくことも大事である。小ギクが順調に伸びてきたのは、オリジナル品種、系統選抜品種の普及成果である。品種の育成にあたっては栽培性、市場性はもちろんのことであるが、農家での作業性、船舶輸送を前提に輸送性についても充分吟味していく必要があろう。品種の育成、開発については経費と時間を要するものであり、試験研究機関の体制を強化し、長期的展望に立って取り組むべきである。

最後に生産、出荷の全県的な調整機能を整備することが課題であろう。生産、出荷調整は出荷団体が中心となり、それぞれの組合員農家に対し、作付面積、出荷時期、栽培品種等を調整、指導しているのが現状である。しかし、冬春季の市場占有率が示すとおり、本県の出荷量の増減が市場価格に大きく影響することを考えた場合、全県的な調整機能を整備することが是非必要である。その調整機能のもとに、市場のニーズ、需要量に即した計画的な生産拡大を図ることが、農家の収益確保につながり、キクの安定的な生産拡大につながると確信する。